

夏目漱石とおしゃれ

ハイカラ漱石

エピソードで知る
漱石とおしゃれ

土井中 照

まえがき

漱石がハイカラになった理由

漱石は真正正銘のハイカラ

漱石のおしゃれな家系

コンプレックスはおしゃれの原動力

もうひとつのコンプレックスは低身長

本書の構成

第一章 ハイカラ漱石の洋服

学生服…外国人教師から錠前屋に間違われた服

夏の制服は欧米の労働着？

大学名の変遷と制服・制帽の制定

漱石作品に登場する学生服・制帽

燕尾服…正装の借し貸り

燕尾服は夜の正装

ロンドンで購入した燕尾服

燕尾服の貸し借り

満韓旅行で借りようとした燕尾服

漱石作品に登場する燕尾服

フロックコート…ロンドンで購入した礼服

イギリス仕立てのフロックコート

新調のフロックコート

見合いと結婚式でのフロックコート

漱石が譲ったもう一着のフロックコート

漱石作品とフロックコート

モーニング…就職に失敗した思い出の服

学習院への就活で逃えたモーニング

よそ行き着になったモーニング

漱石作品とモーニング

背広…教師時代の制服的存在

漱石のトレードマーク服

松山中学時代の背広

熊本時代、漱石は教授服を着ていた

イギリス留学前に逃えた背広

イギリスでの背広着用の失敗

帰国後の背広の着こなし

明治天皇の大喪の時に着た背広

漱石作品に登場する背広

オーバーコート…コートもマントも外套

カーライル好きの漱石と外套

漱石の日常と外套

漱石の親友・中村是公の外套

外套の歴史

漱石作品と外套

インヴァネス…洋服だが和服にも合わせる

和洋折衷の防寒着

原稿料でインヴァネス

漱石のインヴァネスはラッコかカワウソ？

漱石作品とインヴァネス

チヨッキ…漱石愛用のチヨッキの数々

写真とエピソードに残るチヨッキ愛

漱石作品とチヨッキ

第二章 ハイカラ漱石の身だしなみ

髪…漱石のイチバンのこだわり

猫が見た苦沙弥と人間界の髪型

お世辞に弱かった漱石

漱石作品と男性の髪

髭…漱石のトレードマーク

髭の形でわかる漱石の年齢

カイゼル髭とコスメティック

靴…足元のおしゃれこそ究極のハイカラ

靴が日本に入ってきた頃

漱石作品と靴

ネクタイ…洋行の思い出と友人たち

時代が変わるときの黒いネクタイ

友人・門人のネクタイの無作法

漱石作品とネクタイ

カフス…背伸びをしたおしゃれの象徴

寅彦土産の金のカフス

漱石作品とカフスボタン

靴…ハイカラ旅行の必需品

洋行で用いた鞆の貸し借り
お気に入りの鞆
漱石作品と鞆

ハンカチ… 婚約時代と出国の思い出

漱石と鏡子の見合い

漱石との別れのハンカチ

漱石作品とハンカチ

第三章 漱石のハイカラものがたり

万年筆… 晩年の原稿に重宝したオノト

漱石の万年筆の変遷

晩年愛用したオノトは、魯庵から百間へ

万年筆を受け継いだ内田百間

電話… あってもなくてもいい存在

電話と漱石

漱石の電話トラブル

ピアノ… 『三四郎』の印税で購入した楽器

漱石がピアノを買ったという謎

漱石の音楽教師への怒り

蓄音機… 声を吹き込込むか？ 音楽を聞くか？

蓄音機に吹き込んだ漱石の声

友人の妻に聞かせた蓄音機

活動写真… 歌舞伎嫌いの漱石の無関心

漱石は活動写真嫌い

漱石の日記に登場した活動写真

靴の木型… 靴の形が崩れないように

本物のハイカラのみが持つ木型

オートストロップ… 新し物好きの漱石の証明

漱石の髭剃りの秘密兵器

漱石の新しいものへの挑戦

エキザンサイサー… スポーツマンの証明

筋トレをしていた漱石

漱石の好きなスポーツ観戦

第四章 漱石作品とハイカラ

吾輩は猫である

原稿料で買ったパナマ帽

海老茶袴は女学生の俗称

仕立ての悪い服と山高帽

坊っちゃん

坊っちゃんはいつも紺の服を着ていたか？

教頭が赤シャツを着用する理由

松山時代の赤いタオル

虞美人草

金時計と銀時計、ニッケルの時計

金ぶち眼鏡は秀才のしるし

坑夫

赤い毛布は田舎者のしるし

漱石も被ったことのある赤毛布

三四郎

男心を惑わせるヘリオトロープ

襟巻はボーアかシヨールか

それから

シルクハットで鰻を食べる

フランネルがイメージする病弱

デパートに先駆けた勸工場の陳列販売

門

エプロンは職業婦人の代名詞

几帳面な漱石が好んだ石鹸と歯磨

彼岸過迄

魔法の杖代わりのステッキ

探偵もどきの目印になった黒い中折帽

行人

まだ珍しかったエレベーター

まがいもののアクセサリー

こころ

鎌倉由比ヶ浜は海水浴のメッカ

先生の奥さんの白粉は仮面なのか

道草

蝙蝠傘には禍々しいイメージもある

見世物のような子供の洋服

明暗

子供用の靴と間違えそうなキッドの靴
探偵が被りそうなハンチング

第五章 漱石の通ったハイカラ店

『虞美人草』と三越の深い関係

妻・鏡子と白木屋でのお買い物

漱石と銀座資生堂

漱石と天賞堂

漱石と白牡丹と白粉

漱石と京都のゑり善

漱石の髪と喜多床

まえがき

漱石がハイカラになった理由

漱石は真正正銘のハイカラ

「ハイカラ」の元々の意味は、「高襟ハイカラ」のことです。欧米から帰ってきた政治家や官吏が、揃いも揃って丈の高い襟のシャツを着ていたことから、西洋文化にかぶれた欧米帰りの人を指すようになりました。「ハイカラ」という言葉の中には「キザ」や「生意気」「半可通」「主体性がない」といった意味を含んでいます。

「ハイカラ」を使いだしたのは毎日新聞の石川半山でしたが、一般に浸透するまでには至りませんでした。この言葉が一気にブレイクするのは、明治33（1900）年8月10日、築地のメトロポールホテルで歴史家・政治家であった竹越与三郎の洋行送別会が催された際、来客の外交官・小松緑が「ハイカラ」と洋行帰りの人々を嘲笑するけれど、揶揄している半山自身もまたハイカラを着用しているではないかと演説で笑いを取りました。そのことを新聞各社がこぞって取り上げたために「ハイカラ」が知れ渡り、一般の人たちも使い出すようになったのです。

また「軽佻浮薄」の面を強調するために、形だけで中身のない「灰殻ハイカラ」という字をあてた記事も登場しています。

ロンドンに来た日本人たちの軽薄さを漱石も感じていました。明治34（1901）年1月5日の日記には「妄あやりに洋行生の話を信ずべからず。彼らは己おれの聞きたること、見たることを universal case（普通のこと）として人に話す。あにはからん。その多くはみな particular case（個別のこと）なり、また多き中には法螺まを吹きて、いやに西洋通がる連中多し。彼等は洋服の嗜好流行も分らぬくせに、己れの服が他の服より高きゆえ、時好に投じて品質最も良好なりと思えり。洋服屋にだまされたりとはかつて思わず。かくの如きものを着て得々として他の日本人を冷笑しつつあり。愚かなることおびただし」と、物見遊山で欧米にやってきた人々を非難しています。

二年間の惨憺たるロンドン生活の思い出を携えて帰国した漱石は、ロンドン仕込みの「高襟」を着こなしていました。第一高等学校と東京大学文科大学の講師として教壇に立つ漱石は、小宮豊隆の『休息している漱石』によれば「ひどくハイカラで、諸先生の中に異彩を放っていたようである。今日流布している写真の先生は、髭を短く刈り込んでいるが、当時の先

生は、カイゼル髭ほど極端なものではなかったとしても、房房と生えた真黒な髭の両端をぴんと刎ね上げ、ひどく気取った風采をしていた」と懐述しています。

門人の森田草平もまた『続夏目漱石』の「三座談の巧さと江戸っ子」のなかで「先生は英吉利を嫌っていられたけれども、倫敦仕込みだけに、何といても洋服はちゃんと身に合った、きちんとしたものばかり着ていられた。とにかく、洋服については大分注文が難しかったらしい。これは倫敦仕込みというよりは、先生の江戸っ子気質がそれを要求したものとみておいてよかろう」と記しました。

「ハイカラ」が流行語となった頃には、否定的な意味合いが強かったのですが、次第に「おしゃれ」「進歩的」「優美」「流行の先端」といった肯定的な意味に変わっていきました。漱石作品にも、そのことが顕著に表れています。

『吾輩は猫である』では「ハイカラの首実検(3)」「いいえ、ただ婦人会だから傍聴に来たの。本当にハイカラね。どうも驚ろいちまうわ。(10)」「あすこの娘がハイカラで生意気だから艶書を送ったんです。(10)」「元をただせば金田令嬢のハイカラと生意気から起ったことだ。(10)」。『坊っちゃん』では「君子を陥しいれたりするハイカラ野郎(9)」「ハイカラ野郎の、

ペテン師の、イカサマ師の、猫被りの、香具師の、モモンガの、岡っ引きの、わんわん鳴けば犬も同然な奴(9)」と、皮肉と軽蔑の要素が含まれています。

ところが漱石の朝日新聞入社第一作の『虞美人草』になると「藤尾さんのようなハイカラの傍へ持つて行くとすぐ軽蔑されてしまう。(11)」「そんなハイカラな形姿をして、大きな紙屑籠なんぞを提げてるから妙なんだよ。(14)」「外交官の妻君にはああいうハイカラでないと将来困るからといったのさ。(16)」。『それから』では「浪人とは誰にも受け取れないくらい、ハイカラに取り繕ろっていた。(8)」「平岡さんは思ったよりハイカラですな。あの服装なりじゃ、少し宅の方が御粗末過ぎる様です。(8)」。『彼岸過迄』では「今頃流行るハイカラな言葉をすぐ忘れちまって困るが……(報告7)」「千代子というハイカラな有毒の材料が与えられたのを憐れに眺めた。(須永の話30)」。『行人』には『ハイカラよ』お重の澄ました顔には得意の色が見えた。(塵労11)」「兄さんの話は西洋人の別荘や、ハイカラな楽器とは、全く縁の遠いものでした。(塵労50)」。『こころ』では「玉突だのアイスクリームだのというハイカラなもの……(先生と私1)」、私はその時分からハイカラで手数のかかる編上を穿いて……(先生と遺書26)」。『道草』では「見てご覧なさい、きつと嬉しがってよ。延子さんはハイカラだって。(48)」。『明暗』では「唐物屋の店先に飾ってあるハイカラな襟飾を見た時……(155)」と、どんどん「ハイカラ」がプラスのイメージに変化してい

るところを見ることができません。

漱石は、明治39（1906）年の「断片」に次のように書きました。

服装などに好みのある人がかえって「ハイカラ」に見えずして、そっちにあまり興味なき人がかえってハイカラに見えることあり。これはこんな訳である。前者はいかに凝ったなりをしてもそれをよく着こなしている。後者はさほどに品物を選ばざるにも関わらず、己れが着けたものをこなしておらん。だから一方は自然に見えて、一方は不自然に陥る。言を換えていえば、前者は厳密なる嗜好の試験に及第せるもののみならず、あつめて身につけているにもかかわらずその選択の際の苦心や、愉快や、自慢に拘泥しておらん。あたかも裸体であると一般の心持ちでいる。しかるに他はさほどにやかましく衣装道具を詮議立てをせぬくせにどこへ行っても、いつまでも己れの服装に拘泥しておる。百姓が大礼服をつけたようなものである。

して見るとハイカラという語はちょっと考えると服装だけできまるようであるが一歩進んで考えるとこれは当人の気の持ちよう。心の態度である。

漱石のおしゃれは自然体を貫き、自己本位を実現するために必要なものなのかもしれない。

漱石のおしゃれな家系

漱石門人の小宮豊隆は『休息している漱石』で「生れた家が、痩せても枯れても、名主という、相当派手な暮らしをしていた家であったということ、そうして親類には遊女屋があり、姉さんだの兄さんだのの住んでいた世界が、そういう空気の濃厚に漂っている世界だったということ、そういうことが見えない因果の糸となって、ここに尾をひいているせいもあるかも知れない」と漱石のおしゃれについて書いています。

漱石の家は名主でしたので、江戸時代には羽振りのいい暮らしができました。漱石は姉たちの芝居見物の話を聞き、まるで夢の中のような出来事だと感じていたのです。

しかし、漱石が塩原家に養子に出された翌年に名主制度は廃止となり、父の小兵衛直克は府庁や警視庁に職を求めて転々とし、しかも詐欺師に騙されて家の財産をなくしてしまいま

す。漱石が養子先から夏目家に戻った頃、夏目家の屋台骨はすでに傾きつつあったのです。

母・千枝の次姉・久は、内藤新宿の遊女屋「伊豆橋」を養子の夫とともに営んでいました。「伊豆橋」は、内藤新宿でも一・二を争う旅籠屋、つまり遊女屋でした。また、長姉の佐和が嫁いだのは「伊豆橋」の跡を継いだ福田家で、しかも、漱石の養父・塩原昌之助が管理していたこともあるという、ややこしい関係です。

そのため、漱石の兄たちは遊女のいる家に遊びに行く機会は四六時中に取りました。

漱石の次男・伸六の『父・夏目漱石』によれば、神楽坂にあった次姉・房の嫁いだ高田庄吉の家の筋向かいの芸者屋が「ご神灯を軒先にぶら下げた東家」で、姉の家にのべつ出入りしていた次兄の栄之助は「竹格子の窓の内側から、向いの東家へ出入りする芸者達を呼びとめたり、からかったりして、遊んでいたのだという(父の家族と道楽の血)」と書かれています。

この「東屋」は、『硝子戸の中』にも出てきます。

私はその東家をよく覚えていた。従兄の宅のつい向いなので、両方のものが入りたびに、顔を合わせさえすれば挨拶をし合っぐらいの間柄であったから。

その頃従兄の家には、私の二番目の兄がごろごろしていた。この兄は大の放蕩もので、よく宅の懸物や刀剣類を盗み出しては、それを二束三文に売り飛ばすという悪い癖があった。彼が何で従兄の家に転がり込んでいたのか、その時の私には解らなかつたけれども、今考えると、あるいはそうした乱暴を働いた結果、しばらく家を追い出されていたかもしれないと思う。その兄のほかに、まだ庄さんという、これも私の母方の従兄に当る男が、そこいらにぶらぶらしていた。(硝子戸の中17)

この「東屋」は、「伊豆橋」の跡を継いだ福田家が所有していた家でした。

まさに夏目家は、こうした遊郭の世界に深く入り込んでいて、漱石もまたこうした雰囲気を感じていたのです。

おしゃれや絵画は、幼い頃から本物に触れるということが大切だといわれます。同様に粋の世界も肌で感じていないと、本当のところはわかりません。漱石は、こうした家庭環境であったため、着物の粋な着こなしを知らず知らずのうちに覚え、次第におしゃれになっていったのでしよう。

コンプレックスはおしゃれの原動力

漱石は、「アバタ」と「低身長」という二つのコンプレックスを抱えていました。

明治3（1870）年4月24日、明治政府は種痘の全国実施を定めました。その翌年（荒正人の『漱石研究年表』ではこの年）に種痘を受け、それが原因で漱石の顔にはアバタが残ってしまっています。

『吾輩は猫である』には「主人はこの功德を施すために顔一面に疱瘡を種え付けたのではない。これでも実は種え疱瘡をしたのである。不幸にして腕に種えたと思ったのが、いつの間にか顔へ伝染していたのである。その頃は子供のことで今のように色気もなにもなかったものだから、痒い痒いといながら無暗に顔中引き掻いたのでそうだ。ちようど噴火山が破裂してラヴァが顔の上を流れたようなもので、親が生んでくれた顔を台なしにしてしまった。（9）」とあり、『道草』には「彼はそこで疱瘡をした。大きくなって聞くと、種痘が元で、本疱瘡を誘い出したのだとかいう話であった。彼は暗い櫛子のうちで転げ廻った。惣身の肉を所嫌わず掻きむしって泣き叫んだ。（39）」と記されています。

猫は、苦沙弥先生のアバタを気にする仕草を見て「主人は見性自覚の方便としてかように鏡を相手にいろいろな仕草を演じているのかも知れない。すべて人間の研究というものは自己を研究するのである。天地といい山川といい日月といい星辰（せいしん）というも皆自己の異名に過ぎぬ。自己を措いて他に研究すべき事項は誰人にも見出し得ぬ訳だ。もし人間が自己以外に飛び出すことが出来たら、飛び出す途端に自己はなくなってしまう。しかも自己の研究は自己以外に誰もしてくれる者はない。（9）」と語り、鏡を覗くのは同時に自己愛の表現でもあると診断しています。

もうひとつのコンプレックスは低身長

漱石の身長は、松山中学から熊本第五高等学校への赴任の際に、広島県の宮島にある旅館「岩惣」の宿帳に記された身長「五尺三寸」という記述から159センチ（157センチとも）といわれています。ただ、この時に一緒に泊まった高浜虚子も同じく「五尺三寸」と書かれ、筆跡も一緒。つまり、宿屋の誰かが代筆したものかもしれません。

また、明治22年3月9日に第一高等中学校で実施された体格検査では、漱石の身長は1・587メートル、体重13・950貫で、キロに直すと52・31キロとなります。ベルツによると、この「五尺三寸」というのは当時の日本人成人の平均身長でした。

漱石が自分の身長が低いと自覚するのはロンドン留学時代です。『倫敦消息』には「向うへ出て見ると逢う奴も逢う奴もみんないやに背が高い。おまけに愛嬌のない顔ばかりだ。こんな国ではちっと人間の背に税をかけたら、少しは儉約した小さな動物ができるだろうなどと考えるが、それはいわゆる負け惜しみの減らず口という奴で、公平なところが向うの方がどうしても立派だ。何となく自分が肩身の狭い心持ちがする。向うから人間並はずれた低い奴が来た。来たと思つてすれ違つて見ると自分より二寸ばかり高い。こんどは向うから妙な顔色をした一寸法師が来たなと思つと、これすなわち乃公ないこう自身の影が姿見に写つたのである。やむをえず苦笑いをすると思うと、これは理の当然だ」と書かれています。

漱石は、当時の英国人の平均身長より10センチほど低かったため、嫌というほどの劣等感と、東洋人としての差別と疎外感を味わいました。これが漱石に潜んでいた「神経衰弱」の進行につながります。

小宮豊隆は『知られざる漱石』の「漱石先生の顔」で「先生は中肉とはいえても中背とはいえなかった。むしろ小男といつてよかつた」と書いています。ただ、「漱石神社の神主」といわれるほど、漱石を崇拜していますから、実際は小男でありながらも漱石が巨大な存在であることを強調しています。

門人の森田草平は『統夏目漱石』の「三座談の巧さと江戸っ子」で「私が先生のお供をして、安藤坂の坂上から右へ折れ、何邸前のだらだら坂を降つて行つて、今度は急な坂をまさに金富町へ出ようとしたり、その小さい坂の途中のことである。私は先生の後について、先生を見下ろすようにして歩いてきたのだが、その時も先生の洋服がしっくり身に合っているのが眼に着いた。しかし、どうも頭の割に肩幅が狭い。やつぱり日本人だなと思つた。こんなことは滅多に気がつかない質ただから、私は少々得意になつて『先生の洋服姿も立派だが、どうも頭の割に肩幅が狭過ぎるようだ』と申上げたら、いきなり『余計なことをいつな』と叱られた』というのです。

草平の言葉に、潜んでいるコンプレックスを刺激されたためなのか、漱石は「そんなことはいわれんでも知つている！」と、怒りの声を投げつけました。

かくして、漱石は自らのコンプレックスを解消する手段として、おしゃれな洋服に自らを包み込んで、ハイカラを追求することに決めたようです。

本書の構成

本書は、漱石のハイカラであった事実を、エピソードや作品を通じてご紹介していきます。第一章は「ハイカラ漱石の洋服」と題して、洋服にまつわるエピソードを取り上げます。第二章は「ハイカラ漱石の身だしなみ」と題して、漱石のおしゃれにまつわる身だしなみや服飾品の歴史を語ります。第三章は「漱石のハイカラものがたり」として、漱石の珍しいおしゃれグッズの数々をご紹介します。第四章は「漱石作品とハイカラ」と題して、漱石の小説に登場するおしゃれアイテムを提示していきます。第五章は「漱石の通ったハイカラ店」として、漱石が通ったり、小説に登場させた店をご案内します。

本書は、これらの研究により、ハイカラな衣服に隠された漱石の真実が、浮かび上がってくることを狙っています。

今までに書いてきた『西洋料理好き漱石』『湯けむり漱石』『スイーツ系漱石』に続く本書『ハイカラ漱石』は、漱石の身近な生活と作品、さまざまなエピソードで漱石の人間性を掘り下げていく「漱石の日常」シリーズの一冊です。次は、漱石と伝統の味や店との関係を掘り下げた『江戸っ子漱石と伝統の味』に続きます。これらの本で、漱石の日常における意外なエピソードとうんちくをお楽しみください。

なお、本書に引用した漱石をはじめとする作品は、俳句を除く一部を除いて常用漢字や新仮名遣い、句読点などを加えて読みやすくしています。また、JISX0208の第1・第2水準以外の漢字が使用できませんので、やむなく別の漢字を使っているものもあります。漱石ファンの方々にはこの点をご了承いただければと存じます。

令和四年六月吉日 土井中 照

第一章 ハイカラ漱石の洋服

学生服…外国人教師から錠前屋に間違われた服



夏の制服は欧米の労働着？

三四郎はこの出立ちで、与次郎と二人で精養軒の玄関に立っていた。与次郎の説によると、お客はこうして迎えべきものだぞうだ。三四郎はそんなこととは知らなかった。第一自分がお客のつもりでいた。こうなると、紬の羽織では何だか安っぽい受付の気がする。制服を着て来ればよかったと思っただ。(三四郎9)

明治25（1892）年、漱石は帝国大学の新任教授・オーガスタス・ウッド（ウッド）を帝国ホテルに訪ねます。マサチューセッツ州生まれで、ベルリン大学、ハイテルベルク大学に学んで文学史を研究したウッドは、ディクソンの後釜として明治25年9月23日から明治29（1896）年7月31日まで帝国大学に招聘されています。小泉八雲は、彼の後任です。

漱石は英文学専攻で首席の成績でしたから、教科書の打ち合わせをするために、ウッドの泊まっていた帝国ホテルに行くように命じられました。帝国ホテルに外国人教師を訪問するというので、漱石は粗相のないよう紐で閉めるタイプのシャツの上にフランネルの金ボタン付きの学生服を着用しています。

ホテルボーイに案内されてウツドの部屋に入ると、寝室に案内されました。ウツドは「フン」というと挨拶もなく、漱石にカバンを渡します。漱石は、この中に本が入っているかもしれぬと探しますが、シャツや衣服が入っているだけで、書籍などは見当たりません。

すると、ウツドがカバンの蓋を開けたり閉めたりするので、漱石もその通りの動作を繰り返すと、ウツドは「鍵が壊れている」といいます。

面食らった漱石が、どうしてこんなことをしなくてはならないのかとウツドに聞くと、「お前は錠前直したろ」といいます。漱石は憤然と立ち上がって「ノー」というと、ウツドは呆れた風に漱石の顔を見ていたのですが、「では、君は誰なのか」と聞いてきました。

漱石が「自分は文科大学の学生で、教科書を相談する件で来た」と説明すると、ウツドは間違いに気づき、「鞆が壊れて錠前直しを待っていたもので……」と、何度も漱石に謝りました。そして、応接室に改めて案内し、書籍の相談をしたというのです。

実は、漱石とウツドはその前日に教室で話をしていたのですが、来日もないウツドは日本人の顔の区別がつかず、漱石であるとは気がつきませんでした。

ウツドは、来日したばかりで学生たちが着る制服のことなど露ほども知りません。欧米では、修理のための火花や汚れを避けるために鍔掛職人は詰襟の服を着ることが多く、軍隊の制服を代用することもありました。詰襟の学生服を着た漱石を錠前屋だと勘違いしたのも無理のないことなのかもしれません。

後日、漱石がロンドン留学をした時、あの時の服装振り返って、西洋人の感覚だと錠前屋に間違われても文句はいえないなど呟いたことを、馬場孤蝶が『明治文壇の人々』に記しています。

大学名の変遷と制服・制帽の制定

漱石が学生だった頃、学校の名前は頻繁に変わりました。明治10年の学制施行により誕生したのが「東京大学予備門」「東京大学」です。明治19（1886）年3月1日に「帝国大学令」が公布され、「予備門」は「第一高等中学校」となり、「東京大学」は「東京帝国大学」に変わります。『東京帝国大学五十年史』には「明治十九年四月二十八日、大学院および分科大

学学生服制を定め、十一月十一日より実施することとす。今日、本学学生において使用しつつある服制は大体において、この時に定められしものなり」、「帽子の形は、欧米諸大学の礼帽に倣いしものにして、後ついに大学全般の用いるところなるに至れり」と記されています。

詰襟の洋服となったのは、陸軍の制服を手本にしたためで、和服と比べて機能性が高く、誰でも品位が保てると思われるからです。すでに、軍人や官吏、警察官、鉄道員などの制服に詰襟が用いられていました。

石井研堂著『明治事物起原』によると、角帽はイギリスのケンブリッジ大学とオックスフォード大学の学帽を真似たデザインであると書かれています。

角帽は、高知出身の学生である和田義睦が、有志とともに被っていた帽子を山口錠之助とともに大学側に帽子を提案し、それが制帽として採用されました。帽子が四角であることから「角帽」と名づけられ、明治時代には帝国大学生の異名ともなります。義睦は「土佐同志会」の発足に関わったり、前輪の大きいオーディーナリー自転車仲間と共同購入したりと注目された学生時代を送り、卒業後は内務省で土木技師として活躍しました。

夏目漱石が米山保三郎と一緒に撮った学生服姿の写真にも角帽が写っています。漱石の帽子はテーブルに、保三郎の帽子は膝に置かれています。この写真は、明治25(1892)年2月、本郷の写真師・中黒実によって撮影されたものでした。

漱石の学生時代に撮った洋服姿の写真は、これ以外に予備門時代、白井亀太郎と一緒に撮ったコート姿(撮影日不明)、明治24年6月の紀元会での集合写真、明治25年6月上旬の霜降りの学生服、12月の黒の学生服、明治27年6月上旬に長尾写真館が出張して撮影した上野不忍池畔の英文学科学生らのものが残されています。また、『京に着ける夕』では、漱石と正岡子規が学生時代の明治25年7月に京都を訪れたとき、「子規はセル、余はフランネルの制服を着て得意に人通りの多い所を歩行いた」と、往時を振り返っています。

漱石作品に登場する学生服・制帽

制服や制帽は、『趣味の遺伝』『京に着ける夕』『三四郎』『こころ』などに学生時代の象徴

として登場します。

『趣味の遺伝』では、日露戦争で戦死した友人の河上浩一（浩さん）の性格を示すところに「この若旦那が制服を着けて学校へ出ると、向うの小間物屋のせがれと席を列べて、しかもその間に少しも懸隔のないように見えるのはちょっと物足らぬ感じがするだろう。余の浩さんにおけるもその通り。浩さんはどこへ出しても平生の浩さんらしくなければ気が済まん」と書きました。

『三四郎』では、主人公が帝大生ということもあり、九州の高校の時に愛用していた帽子が角帽に変わるところや、制服姿の写真を家族が望んでいることが描写されています。

「頭には高等学校の夏帽をかぶっている。しかし卒業したしるしに徽章だけはもぎ取ってしまった。昼間見るとそこだけ色が新しい（1）」、「三四郎は新しい四角な帽子をかぶっている。この帽子をかぶって病院に行けるのがちょっと得意である（3）」、「母の手紙があるので、まず、それから片付け始めた……大学の制服を着た写真をよこせとある（4）」、「翌日は日曜である。三四郎は午飯を済ましてすぐ西片町へ来た。新調の制服を着て、光った靴を穿いている（5）」などの描写があります。

『つころ』の「先生と遺書」には、

「私は東京へ来て高等学校へはいりました。その時の高等学校の生徒は今よりもよほど殺伐で粗野でした。私の知ったものに、夜中職人と喧嘩をして、相手の頭へ下駄で傷を負わせたのがありました。それが酒を飲んだ揚句のことなので、夢中になぐり合いをしている間に、学校の制帽をとうとう向うのものに取られてしまったのです。ところがその帽子の裏には当人の名前がちゃんと、菱形の白いきれの上に書いてあったのです（4）」、「私は書生としてそんなに見苦しい服装はしていませんでした。それから大学の制帽を被っていました。あなたは笑うでしょう、大学の制帽がどつしたんだといって。けれどもその頃の大学生は今と違って、大分世間に信用のあったものです。私はその場合この四角な帽子に一種の自信を見出したくらいです（10）」と、現在の妻を巡って親友のKとの間に起こった恋愛時代の出来事が記され、学生帽が先生の青春時代の象徴となることがわかります。

漱石作品を眺めると、制服よりも制帽の方に大きな比重が置かれています。まさか、ウツドとの制服のことで心に傷を負ったためではありませんまい。

燕尾服…正装の借し貸り



燕尾服は夜の正装

「本当にさ。園遊会に燕尾服を着てくるなんて——洋行しないだっつてそのくらいなことはわかりそつなものだ」と相槌を打っている。向うを見るとなるほど燕尾服がいる。しかも二人かたまって、何か話をしている。同類相集まるという訳だろう。高柳君はようやくくれを笑っているのだと気がついた。しかしなぜ燕尾服が園遊会に適しないかはどうして想像がつかなかった。(野分9)

燕尾服は、裾が燕の尾のように見えることから、このように呼ばれます。夜会服として、最上級の位置を占めているのですが、昼間に開催される園遊会に燕尾服で出席するのはマナーに反します。みんなから冷笑されるのは当然のことでした。しかし、粗末な服で入場せざるを得ない貧乏な高柳君には、男性の夜間の正装であることや、「燕尾服が園遊会に適しないかはどうして想像がつかなかった」のでした。

英語では、フロックコートも含めて「Tailcoat」と呼び、燕尾服のみを指す場合には「Evening Tailcoat」といいます。燕尾服には、白い蝶ネクタイを着用することから、ホワイトタイ(White tie)とも呼ばれます。ちなみに、昼の正装はモーニングコートです。

明治34（1901）年1月22日、漱石が妻の鏡子へ宛てた手紙には「男子服装はすこぶる地味にて、せびろも黒多く、ズボン縞あれども黒ずみて遠方から見れば無地と思うようなものみに候。中以下は夏冬同じものをつけおり候由。少し上等になれば、晚には必ず燕尾服に着換えて食事をなす風に候。燕尾服は必ず晩の礼服ときまりおり候」とあり、ロンドンのファッションが極めて地味で、ドレスコードに忠実であることを報告しています。

ロンドンで購入した燕尾服

上記の手紙には「当地の品物は高き代わりに、皆丈夫向きに候。中にも男子の洋服はパリスよりも倫敦ロンドンがよるしき由、なるほど結構に候。小生も当地にてフロックと燕尾服を作り候」と書かれており、漱石はロンドンの洋服屋でフロックコートと燕尾服を誂えていることが分かります。

『満韓とどこどこ』には「燕尾服はその上、倫敦留学中トテナムコートロードの怪しげな洋服屋で、もっとも安い奴を拵えた覚えがあるが、爾来箆笥の底に深く蔵しているのみで、親友といえども、持ってるか持っていないか知らないくらいである」とありますから、これはロンドンで誂えた燕尾服で間違いありません。

当時、漱石はフロッテン・ロードのブレット家に下宿していましたから、徒歩でオーヴァル駅まで出れば地下鉄のトッテナム・コート・ロード駅に着くことができました。駅を降りると、ロンドンの繁華街オクスフォードストリートトッテナムロードの東端にあるトッテナムロードの地域になります。

漱石のイギリス時代の『ノート』には、「Haymarket theatre へ The School for Scandal ありし時、これを見んとて赴けり。時に券売切のため、やむをえず 756d.（＝7シリング6ペンス）の上等なところへ入れり。これ余が英国の芝居を見たる始めての経験なり。左右前後を見ればことごとく燕尾服と礼服をつけたるもののみなり。余は赤靴にセビロにステッキを携えたり。初めの頃は舞台に気をつけておれども何となく落付かず、すこぶる心苦しかりが、暫くする程にだんだん演芸に釣り込まれて、果は己れの赤靴や、セビロのことは忘れただ演芸のみを見つめおりたり」と書かれています。ロンドンでの観劇を心置きなく愉しむために、どうしても燕尾服が必要だったのでしょう。

ただ、『倫敦消息』によれば、「窓の正面に箆笥がある。箆笥というのはもったいない、ペンキ塗の箱だね。上の引出に股引とカラとカフが這入っていて、下には燕尾服が這入っている。あの燕尾服は安かったがまだ一度も着たことがない。つまらないものを作ったものだなと考へた」とあり、ロンドンでも箆笥の肥やしになっていたようです。

燕尾服の貸し借り

漱石がイギリスで購入した燕尾服ですが、大谷（オホタニ）繞石の『漱石先生の面影』に「出発前、先帝陛下に拝謁を仰せつかることになったが、フロックでよからうと思つたのに、燕尾服でなければならぬと知り、あわてて、俵を先生の宅へ走らせ、燕尾服の借用を申し入れた。『合うかどうかここで着てみ給え』といわれて、先生の前で、余り白からざるワイシャツを露わにして着てみた。『背中向いて見給え。よく合つてる。仕立屋へやって皺のしをして貰つて着給え。そう、僕はもうそんなものをきることはあるまいから、そんなものでいいなら、君に進呈してもよい』ともいわれた」とあります。

この燕尾服は、『満韓どころどころ』にも「いくら大連がハイカラだつて、東京を立つ時に、この古燕尾服が役に立とうとは思いがけないから、やっぱり箆箭の底にしまったなりで出てきた。(7)」と記されています。

繞石は明治42（1909）年から2年間、文部省の外国留学生としてロンドン大学で英文学を学びました。当時の出来事を綴った『案山子日記』には、オペラに行ったり、紳士淑女の前で暮のルールを披露する際に燕尾服を着用したことが書かれています。繞石は、ロンドンで燕尾服を5ポンド15シリングで詠えています。

満韓旅行で借りようとした燕尾服

同じ年の9月から10月、漱石は満鉄総裁の中村是公の招きで満韓へ旅立ちます。是公は成立学校時代からの親友で、「南満州鉄道会社についていたい何をするんだい」と漱石が聞いたところ、「どうだ今度いっしょに連れてつてやろうか」ということになり、満韓旅行が実現しました。

9月7日、是公から舞踏会に出てみないかという誘いがありました。そのためには燕尾服を着なければなりません。是公は、秘書の上田恭輔へ燕尾服を借してやれと頼んだのですが、「私のは誰にも合いません」と断られてしまいます。結局、漱石は舞踏会を欠席しました。

漱石作品に登場する燕尾服

処女作『吾輩は猫である』には、直接「燕尾服」とは出てきませんが「かように化物ども

がわれもわれもと異を銜い、新を競って、遂には燕の尾にかたどった畸形まで出現したが、退いてその由来を案すると、何も無理矢理に、出鱈目に、偶然に、漫然に持ち上がった事実では決してない」とあります。これは吾輩が銭湯に行つて、人間の服装の歴史を語る場面にでてきます。

知る人ぞ知る、知らぬものは知らん顔をしておればよろしかろう。歴史はとにかく彼らにかかる異様な風態をして夜間だけは得々たるにもかかわらず内心は少々人間らしい所もあると見えて、日が出ると、肩をすぼめる、胸をかくす、腕を包む、どこもかしこもことごとく見えなくしてしまうのみならず、足の爪一本でも人に見せるのを非常に恥辱と考えている。これで考えても彼らの礼服なるものは一種の頓珍漢的作用によつて、馬鹿と馬鹿の相談から成立したものだということが分る。それが口惜しければ日中でも肩と腕を出していて見るがいい。裸体信者だつてその通りだ。それほど裸体がいいものなら娘を裸体にして、ついでに自分も裸になつて上野公園を散歩でもするがいい、できない？ できないのではない、西洋人がやらないから、自分もやらないのだろう。(7)

この記述は、漱石が敬愛してやまないカーライルの『衣服哲学』を思わせます。『衣服哲学』

は、ドイツ人の変人哲学者であるディオゲネス・トイフェルスドレックが書いた衣服に関する哲学をカーライルが仕立て直すという構成になっていますが、これは嘘八百の設定でした。「トイフェルスドレック」が、ラテン語で「仕立て直された仕立屋」という意味を持つことでも、でたらめな設定でうんちくを語るといふ、カーライルの新機軸の哲学書だったので。

『吾輩は猫である』を書こうと思ひ立つたとき、漱石はこの本のコンセプトを拝借したのに違いありません。『吾輩は猫である』第7章の先頭の場面には「衣装の歴史をひもとけば――長いことからトイフェルスドレック君に譲つてひもとくだけはやめてやるが、――人間は全く服装で持っているのだ」といふ、まるで弁解のような猫のセリフがあります。